

仙台中央倫理法人会モーニングセミナー

- 精神障がい者の方々と共に生きる -

2007年6月28日

NPO法人シャロームの会
理事長 行政書士 菊地 茂

1. はじめに

(1) 菊地 茂 略歴

- ・ 宮城県松島町出身(1956年9月11日生)
- ・ 東北工業大学高校・東北学院大学法学部卒業
- ・ 地方公務員・民間会社勤務を経て、シャローム行政書士事務所を設立(1992年)
- ・ 精神障がい者の方の法律相談に関わる(2000年)
- ・ NPO法人シャロームの会設立(2003年)
- ・ トータルカウンセリングスクール(田中信生先生)で学び始める
別紙 業務案内書をご参照下さい。

(2) 精神障がい者との出会い

精神障がい者の方の法律相談

職親事業所として

「職親制度」…社会適応訓練事業(普通の会社に就労する自信がない人が協力的事業所に通いながら就労を続けていくために必要な訓練を受ける事業)

【豊かな人生を生きる～オンリーワン人生を生きる】

- ・ 豊かな人生を生きる秘訣は人を変えるのではなく「自分の心の持ち方を変える」こと。そうすると周りの世界も変わる。どうしたら自分の心の持ち方を変える事ができるのか。それにはどんな状況にあっても、どんな人に出逢っても前向きに捉える心を養うこと。そのためには揺るぎない人生観を持つこと。何を見ても何を聞いても「素晴らしい」と考える心構え。
- ・ 人を変えることにエネルギーを費やすのではなく、自分を変えることに全力でエネルギーを使う。他人と過去は変えられない。変えられるのは自分と未来です。それは自分の心次第。
- ・ 変えられないものを変えようとするのではなく「変えられないものを受け入れる」事に徹する
「変えられないものを受け入れる心の平安を
変えられるものを変える勇気をそして
その違いを見極める知恵を。」(ラインホールド・ニーバー)

2. 精神障がい者を支援する - NPO 法人シャロームの会の立ち上げ -

(1) 「べてるの家」の訪問

「べてるの家」って？

今日も、明日も、あさってもべてるは問題だらけ
偏見・差別大歓迎 決して糾弾はいたしません。
利益のないところを大切に 会社を作ろう
安心してさぼれる会社づくり

病気を生きる

幻聴から「幻聴さん」へ
自分で付けよう自分の病気 勝手に直さないという生き方
昇る生き方から降りる生き方へ 病気に助けられる
失敗、迷惑、苦労もOK それで「順調」

川村 敏明先生

〈浦河赤十字病院 精神科医師〉

治せない医者 治さない医者
病気をもちながらも安心して暮らせるかどうか
病気があっても損をしない社会
支援的な医療 - その人の暮らしを大事に
「とじこめる」のではなく - 「出会い」という機会を大切に

向谷地 生良先生

〈浦河赤十字病院 精神科ソーシャルワーカー〉

当事者の人たちと一緒にくらし
彼らは「敏感な性能の良すぎるセンサーをもった人たち
発病 - 「関係の危機を緩和する装置」
緩和装置をもった彼らの「可能性」に着目していきたい
治そう(変えよう)ではなく、そのまま
彼らは悩む事のプロ

(2) 「ヘール」への訪問

ヘールの町は「フランダースの犬」の舞台となったアントワープという町から
1時間ほどの処にある農業中心の人口3万程ののどかな町。

町の中心には国立の精神病院があり、病院には殆ど患者さんは
おらず約700名の身体や精神のハンディを持った方々が街の一
般家庭の中で暮らしている。〔その里親制度がもう1000年近く
も続いている〕

受け入れる家庭では、患者さんの病名も病歴にもこだわらず、ただ
そのままの存在を家族の一員として受け入れている。

当事者はその家庭で農業の仕事や家事を手伝ったり、近くの作業所
のような所に通ったりしている。夜はまた家族と共に過ごして、多くの
人がその生涯をその家庭で暮らす。

この街の人たちにとっては先祖の代から脈々と続いてきたごく自然なこと。
そしてそのような体制を、病院の200名のスタッフが支えている。

(3) 仙台を精神障がい者の方が安心して暮らせる街に

仙台を「べてるの家」や「ヘールの街」のように
…とはいっても、仙台は浦河やヘールとは違います。仙台でできる事、仙台
だからできる事をつないでいって、安心・優しいネットワークづくりをし
ていきたい。

2000年5月

職親制度を利用して就労支援がはじまる(シャローム行政書士事務所)

2003年12月

NPO法人シャロームの会法人取得

2004年4月

小規模作業所「アトリエぶどうの木」開設

クリーン班「夢工房・ノア・のあ」の活動開始

2004年5月

設立記念講演・パーティー(仙台市民会館にて)

2005年3月

1周年記念オカリナコンサート&講演会(仙台市福祉プラザにて)

2005年8月

エイブルアート「ワークショップ&『遠足』上映会(仙台市福祉プラザにて)

2006年4月

2周年記念コンサート&講演会(仙台市福祉プラザにて)

2006年12月

喫茶店「太陽とオリーブ」開店

2007年3月

宮城県より指定障害者福祉サービス事業所に指定される。

2009年(平成21年)4月

(仮称)仙台青葉障害者福祉センターの運営受託予定

(4) シャロームの会の理念

この会は、豊かな人間関係を構築するために互いの個性を受け入れあい
ハンディのある方たちの社会的自立を目指し、へだたりなく喜びを分か
ち合う事を目的とする。

病気であろうと、なかろうと一人ひとりが素晴らしい存在である。

「人はみなそのままの存在が素晴らしい。なぜならそのような者
として生かされているから」

(5) シャロームとは…

「大丈夫」- 何が大丈夫なのか

一元に生きる

4つの生き方

- 「お前は本当にだめな子だ。だからまたやったのだ。本当にしょうがない。」
- + 「今は景気がいいけどやがてダメになる。しっかりしないとイケない。人生いい時ばかりではない。必ずダメなときがやってくる。」
- 「今はだめでも必ずよくなる」 - オンリーワン人生ではなく、ナンバーワン人生を目指す。
- + 「あなたは本当に素晴らしい子だ。だからもっと素晴らしくなる。」

二元論(プラスとマイナス「良い・悪い」2つのものを並列する考え)

モルデカイ・モーゼ『日本人に謝りたい - あるユダヤ人の懺悔』(日新報道)
戦後ルーズベルトの側近であったユダヤ系アメリカ人が日本の占領政策に関わり、産業界で取り入れていた「プラスとマイナス」という二元論を日本人の人間教育に取り入れた。

「拝」に生きる

かつて日本でも、一元の世界に生きた時代が平安時代にありました。400年弱続いたこの時代には、死刑の執行すら稀であったと言われている。

この平安初期に「拝」という言葉が生まれた。「拝」という字は「手偏」に「手」と書きますが、右手と左手という異なったふたつのものがひとつに合わされた字です。日本語の返事の「はい」はここから生まれた。日本語の「はい」は「イエス」と「ノー」も兼ねる。「はい」の中に「イエス」も

「ノー」も入れる日本語と「イエス」と「ノー」とは全く別の英語との違いがここにある。

そのままのあなたが素晴らしい

「being」= 存在、いのち

「doing」= 行為 「できる・できない」「強い・弱い」「多い・少ない」

「受容」

行為とは相対的で下を見ればキリがなく、上を見ればまた無限の世界。人がどのようなことをしたという事ではなくその人の存在そのものを受け止めることを受容という。

例えば・・・「私は物を盗みました」とだれかが言った時その人があるがまま受け入れるという事はその行為を肯定したり否定したりすることではなく、

その人がそうせざるを得なかった気持ちを受け入れる事。「誰でも盗む
ものですよ」とか「盗むのは悪い事ですがあなたの場合は特別です」
という言い方ではなく、盗んでしまったというその事に対して「盗んだの
ね」と肯定でもなく否定でもなく、そのままそっくり包む事。

自己受容は他者受容に比例する。

どうすれば相手があるがままスッポリ受け止める事ができるのか。それはま
ず自分自身を豊かに受け入れていく事。時代の価値観などによって自分を裁
き、自分は無力でダメな人間だと信じて疑わない人が多くいる。そのような
人からは人を受け入れる「説明」は生まれても、相手の懐に飛び込んだり相
手を心から受け入れるようなエネルギーや温もりは生まれてこない。

(6)心の病気は関係病

しばらく前までは100%遺伝的な要素が原因となって起こると言われてきた心の
病も現在は特に0から3歳までの母親との基本的信頼関係に原因があると言われて
います。

つまり、母親と子どもとの関係が多すぎたり少なかったり、時には全くなかったり
歪んでいたという経過があったとき、後にあるきっかけ(誘発因)を通して各々
の病状が現れてくる。

心の病気は母親との関係病。心の病気にはいろいろな要因があり、遺伝的要素もあ
るが心の病の原因の一部が母親との基本的信頼関係に源を発していると考えられる。
だからもう一度正しい関係を築くことによって心の病に大きな変化をもたらす事が期待

で

きる。

心の病ばかりではなく、私たちの日常の出来事の中の自殺・暴力などもこの関係概
念に因を発しているのではないかとされている。

(7)自立して生きる

自信をもって生きること

人と比べないで生きる。目の前の結果と自分の価値とは関係ない。

等身大の自分自身を見出し受け入れ続けること

自分の実力を知り自分を決して責めないこと。

自分自身を励まし続けること。

3.さいごに…

(1)

「贈り物」

「Present」



「今この時」「現在」

幸せへの大切な鍵は過去を振り返ることで、まだ来ない未来に不安を抱くこと
でもなく「与えられた今、この時が最高」としっかりと心に語り聞かせる事。

(2)なぜ人の世に悲しみがあるのか

悲しみはそのことによって打ちひしがれるためではなく、より良き人生、本物の人生を得るための贈り物。

悲しみ、それは愛の人になるための人間だけが得ることのできる大切な贈り物。悲しみがなくても愛の人になることができると私たちは思う。

つらい勉強や、或いは厳しい練習などをしなくても名優になれると思ひ、またなりたいと願う。しかし涙の夜を通る事なしに朝のすがすがしさは体験できず、涙と共にパンを食べる事なしに同じ境遇にある、いや、それ以上の悲しみにいる人々の心を思いやることができない。

「知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める」

悲しみを通してのみ、人の心に深く共感し、その共感が現実には工夫を生み出し、その状況にしかない手作りの対応策を日々の生活から見出して生きることができる。このような人生こそ気概のある生き方と言える。

悲しみ、それは自分しか持つことのできない、お金で買うことのできない、愛の人になるための贈り物。

悲しみが癒される(治る)とは体にハンディキャップのある人の体がそのままであったとしてもハンディキャップのない人以上に生き生きと生きることができること。

(3)受ける人生よりも与える人生

いつも前向き肯定的に生きる。受けるより与えるほうが幸いと考えて生きる=「一元の人生」

「最も小さい者たちのひとりにしたのはわたしにしたのです。」

人は自分を守ろうとして弱い人、傷ついている人などをのけようとする。しかし明日は我が身になることが多いのでは。またいと小さい、今朽ちゆく者への関わりこそ実は自分自身を大切にする生き方であり、この地上の計算と異なる天に宝を蓄える。

“今日は残りの人生の最初の日”